

グローバリゼーションと韓国・基地村の性売買

ちよん ひじん
鄭 喜鎮

要旨

この発表で私はグローバリゼーションによる基地村売春の状況の変化が、フェミニズムにおける売買春問題にも変化をもたらしていることについて述べ、そしてポスト・コロニアル（第三世界）フェミニズムによる売買春問題の解析を試みたい。韓国・基地村での売春についての具体状況を報告するには時間も限られていることから、ここでは東アジアの基地村売春の実態が、ジェンダーあるいはセクシュアリティの問題を唯一の矛盾と捉える欧米の白人中心主義フェミニズムに対してその脱構築・再構築を迫っているということを中心にお話したい。韓国基地村の性産業で働く移民女性労働者（あるいは人身売買被害女性）は送出国と受入国との間の経済格差による「犠牲者」という一面的な存在を越えて、その国境を越えたセクシュアリティがジェンダーというカテゴリーそのものを容容させる政治的存在として、またその社会における人種差別に対する批判者として立ち現れている。

売春を性差別構造の一部あるいはその結果と捉えてきた西洋のラディカル・フェミニストたちは、女性がどのようにしてセックス・ワークや人身売買に陥るのかを明確に説明することができない。それはまた白人で成人で健常者である者の視点から、売春問題を自由と選択の問題と捉えてきた急進的あるいは自由主義的なフェミニズムにもいえることである。さらに言えばこうしたフェミニズムは、アジアの基地村（韓国の米軍基地付近に形成された町）で働く女性たちの経験に言及していない。アジアの基地村で女性たちが従事するセックス・ワークは個人の意思か強制かが問われるべき問題ではなく、生存をかけた生活条件の問題なのである。

グローバルに拡大する南北格差は労働者と資本家との格差よりも労働者間の格差を拡大させているが、それはまた男女間よりも女性間の格差を押し広げている。したがってグローバリゼーションの影響を理解するために、フェミニストは性差別に加えて階級、民族、国籍の視点をもって女性のなかにある差異に注目しなければならない。今日の売春はジェンダー関係に加えて民族的なまた国際的な矛盾の結果である貧困の問題と密接につながっている。いまやセックス・ワーカーの存在は東南アジア、南米とアフリカなど各地のセックス観光のなかで女性から少年にまで広がっている。例えばフィリピンのオロンガポでは、バクラ（タガログ語でゲイあるいは女性的な男性の意）と呼ばれる男性たちが男性外国人を相手に売春をしている。

1996年から今日までの間に韓国基地村でセックス・ワークに従事した者の90%は東南アジア（大半がフィリピン）とロシアからの移民女性である。国内的な視点からみれば、売春は性差別的な権力構造の産物といえるが、グローバリゼーションの現実によって民族と階級の問題が組み込まれた結果、その性格は変化している。韓国基地村の売春は1945年米軍の駐留とともに始まり、特にトゥレバン（姉妹の場所の意）の活動によって1986年には全国的な女性運動の重要課題となった。そうであるにもかかわらずこの二年間にわたって「基地村売春の原因は韓国に対する米国による主権侵害か、あるいは

社会の性差別構造か」という議論が続けられている。

女性労働力についていえば、韓国は東南アジアに対しては受入国であり、一方、米国と日本に対しては送出国である。にもかかわらず、長年にわたる日本と米国への従属の経験から、韓国人のなかには一般に被害国民という意識が強く共有されている。軍隊「慰安婦」問題がまだ解決されていないという事実も韓国人に被害者としてのアイデンティティを強めさせる。この被害者意識のゆえに韓国人にとっては東南アジアから来た労働者に対する抑圧と虐待の問題を省察することが困難なのである。基地村の移民女性たちは米軍兵士と同時に一般の韓国人を相手に売春を行っているが、その証言のなかからは韓国人の客のほうが暴力的だという声が聞かれる。いわば韓国人のいう「民族対立」がまさに基地村で起こっているのである。そこでは韓国女性が搾取されるのではない。東南アジアの女性が韓国男性と米軍兵士によって搾取されるのである。

それが買春によるものであれなんであれ、韓国男性はしばしば外国女性との性行為を「白い馬に太極旗（国旗）を立てる」とか「富士山に太極旗を立てる」と表現する。ロシア人女性に対する買春が広く存在していることは、米国女性に対する韓国男性の欲望（米国に対する「復讐」心であり個人的な形での韓米間の権力関係の逆転）を表している。アジア各国にある基地村で、国際政治とその国での権力関係を反映して「男性」「女性」というカテゴリーが変容している。アジアの米軍基地周辺で「男性」といえば、それは米兵のことだ。その国の男性はその国の女性の所有者あるいは指導者としての地位を米軍兵士の存在によって奪われている。あるいはその国の男性は女性たちがセックス・ワークで稼ぐ金によって生活している。いうなればその国の男性は脱男性化されている。

この文脈でいうならグローバリゼーション以前の時代とは異なり、基地村の女性セックス・ワーカーとは韓国女性のことでなくなっている。今、韓国の街頭で性的な蹂躪の対象を物色する米兵たちは「おい。あの娘、韓国人だぜ」といって驚きの目を向けるのである。

基地村の移民女性たちの人権が問題にされる時、市民社会と韓国メディアが男性支配の下にあるために、その注意が向けられる先は韓国男性の関心を反映したものとなる。とくに注目を浴びるのはロシア女性よりもフィリピン女性である。韓国ではフィリピン女性はセックス・ワークと同時に製造業に従事しており、したがって市民社会の「人権団体」がセックス・ワークに何らかの影響を与えても、彼女たちは別の仕事を見つけることができる。ロシア女性の場合はそうはいかず、つねに性産業に縛られている。これは性産業のなかにロシア女性に対する韓国男性からの高い需要があることを表している。韓国にいるロシア女性に対してメディアや人権問題に取り組む市民社会の関心が低いのは、彼女たちの人権を守ることが韓国男性の買春する権利と対立することになるからである。

【日本語訳 河合大輔】